

第二百七十七話 「陸軍は暴力犯、海軍は知能犯」説

本を読んでいると、妙に納得するような金言に出会うことがある。『笠原十九司著「日中戦争全史」(下)高文研』をつらつら眺めていた時に、同書「あとがき」に「陸軍は暴力犯。海軍は知能犯。」との書かれている箇所に出会った。蓋し的を得た「名言」だ。

この金言は、戦後の「海軍反省会」で豊田隈雄元海軍大佐が述べたものであるという。同書の一部を抜粋・紹介する。

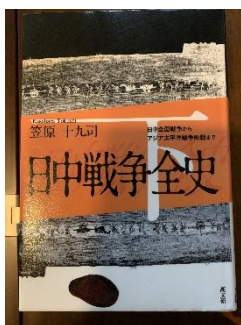
1 豊田隈雄元海軍大佐略歴

1901～1995 大分県出身 海兵51期、海大、
最終軍歴 在独海軍武官補佐官 最終階級 海軍大佐
人物像(Wikipedia から)

「日中戦争当時には台湾からの中攻による渡洋爆撃を考案、自ら搭乗してこれを指揮し、金鵄勲章を拝受している。しかしこの時の賞金1万円はついに支払われず、戦後佐藤首相より金杯を受けたのみで、請求権を放棄させられたという。戦場にあつては勇猛果敢な航空参謀、海軍武官補佐官としては、誠実かつ有能な外交官であった。

戦後は、日独協会の常務理事を務め、日独友好に尽力した。(中略)協会の青壮年部のメンバーからも人望があったという。裁判対策については、資料収集の他、戦後に海軍の高級将校OB達が行った海軍反省会の場で貴重な証言を多く残した。理由は後世のために海軍が行った良い事も悪い事も残し、教訓とするためだったと言う。また、兵学校において高松宮宣仁親王と同期であったことから、晩年は宣仁親王妃喜久子の囑託を受けて宣仁親王の日記(『高松宮日記』)の出版事業にも従事していた。

2 同書「あとがき」から抜粋(364p～365p)



『本書「はじめに」を読んでいただくだけでも分かるように、盧溝橋事件の前年の一九三六年に日中戦争を発動しようとして陸軍に働きかけたのは海軍であったし、華北を戦場に限定して北支事変として開始された日中戦争を、大山事件という上海海軍特別陸戦隊の大山勇夫中尉を犠牲にした謀略事件まで仕掛けて一挙に上海へと戦場を拡大させ、宣戦布告もなしに中国の首都南京に渡洋爆撃を加えて日中戦争を全面戦争化させたのも海軍であった。そして日中戦争からアジア太平洋戦争へと移行していく過程で海軍がはたした役割は陸軍より大きく、決定的であった。

なによりも海軍航空隊は、一九三七年八月十四日の杭州・広徳への渡洋爆撃から始まって、一九四一年九月まで四年間にわたり、毎日のように中国の都市や港湾、鉄道や駅・列車・船舶、飛行場や軍事施設などにたいする爆撃をおこない、それは爆撃機と戦闘機の増産にともなって空爆は年ごとに激しくなり、ついには本書で詳述したように抗日戦争期の中国国民政府の首都重慶にたいする長期にわたる大規模な無差別爆撃をおこない、重慶の市街を徹底的に破壊し、多数の市民を殺害したのである。

本書下巻で引用した豊田隈雄の「陸軍は暴力犯。海軍は知能犯。いずれも陸海軍あるを知って国あるを忘れていた。敗戦の責任は五分五分である」(二一〇頁参照)という証言は日中戦争にもあてはまり、侵略戦争としての日中戦争の責任は「陸海軍五分五分である」と敷衍することができよう。これまでの日中戦争の歴史書は海軍のはたした役割が解明され分析されていないことにおいて不十分であり、端的にいえば、日中戦争そのものの歴史事実とは異なっているということになる。』

*責任の擦り合いは見苦しい限り。公正な視点で戦争は見るべきだ。紙面の関係上割愛したが、本心対米戦反対なるも、それを言い出せない海軍、何とも日本的？

(了)